様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１７３０４

研究課題名（和文）マルチメソッドアプローチによる学級の社会的目標の研究

研究課題名（英文）The research on classroom social goal structures:multi-method approach

研究代表者
大谷　和大（Ohtani, Kazuhiro）

北海道大学・教育学研究院・助教

研究者番号：２０６０９６８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、（１）学級で強調される規範が心理的リアクタンスおよび規範の共有に及ぼす影響について場面想定による実験、（２）学級内でどのように規範は伝えられているのか学級づくりの様子の観察、（３）規範を効果的に伝える方法について場面想定法による実験、（４）学級の社会的目標構造と教師側の要因との関連を検討した。規範に関する目標は心理的リアクタンスを喚起し、規範を共有意図を低下させていた。規範の伝達には、命令口調でない場合は、「～しよう」など接近的な伝え方が効果的であることが分かった。社会的目標構造のうち、向社会的目標は、教師効力感の各側面と正の関連を有していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、学級で強調される社会的目標と心理的リアクタンスに着目し、心理的リアクタンスの喚起が学級の規範の定着を阻害する可能性を示した。心理的リアクタンスはこれまで教育心理学領域においてほとんど検討されてこなかった要因であり、学術的に貴重な知見を提供するものと考えられる。本研究で得られた一連の成果は、学級経営の方略に示唆を与えるものである。すなわち、高学年のクラスでは過度に規範を重視しすぎないこと、規範のメッセージの統制力が強くない場合は、接近的（～しよう）に伝えることなどが示唆された。これらの成果は、学級以外の場面における規範にも応用できる可能性を有していると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examined (1)the effect of classroom compliance goal on psychological reactance and intention to follow the instructions, (2)how classroom compliance is conveyed in actual classroom settings, (3)the factors that moderate negative influence of classroom compliance goal, (4)the correlates of teacher report of classroom social goals. We found that compliance goal can evoke psychological reactance and undermine intention to follow the instructions. For the moderator of the effect on classroom compliance and psychological reactance, valence of the message moderated the effect; in low controlling language, approach form of message decreased psychological reactance. Teacher report of classroom goal structures, especially prosocial goal structure positively correlated the dimensions of teacher efficacy.

研究分野：教育心理学

キーワード：社会的目標構造　心理的リアクタンス　学級経営　小学生

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

学習動機づけや心理適応を促進させる要因として、学級環境は重要な要因の一つである。申請者は、これまでの研究において、小学校の学級で強調される社会的目標（社会的目標構造）に着目し、社会的目標構造が学習動機づけおよび学級適応に関連するプロセスを大規模調査(N = 3660：116 学級)により検討した(H24~H26 科研費若手 B)。社会的目標は主に児童の向社会的行動や相互の思いやりを強調する向社会的目標構造、学級内での細かな規範の強調（教室では静かにする）に大別される。向社会的目標構造の学級ほどクラス内で勉強の教えあいがなされ、結果的に学習動機づけに結び付くことが分かった。一方、規範遵守目標は統制的な雰囲気をもつことから、競争的な学級風土とも正の関連が見出された(大谷他, 2016 教育心理学研究)。

学級の規範と心理的リアクタンス

このような統制的な雰囲気は一般的に心理的リアクタンスを誘発することで、かえって学級の規範の定着を妨げる可能性がある。心理的リアクタンスとは心理的な反発という意味であり，自身の自由が侵される脅威，または自身の排斥の脅威に対して発生する動機づけをさす(Brehm & Brehm, 1981)。説得的メッセージに対して心理的リアクタンスが発生すると，当該のメッセージに対する態度や行動の意志(i.e., 内容に従うかどうか)に負の影響を及ぼすことが示されている（Dillard & Shen, 2005; Rains & Tuner, 2007）。学級の規範は学級経営において重要な意味も有することから、規範を児童に対してどのように伝えるのが効果的かについて検討する必要がある。また、これまでの研究では、社会的目標構造と教師側の要因（e.g., 教師効力感）との関係については検討されてこなかった。教師側の要因との関連も検討する必要がある。

２．研究の目的

本研究では小学生あるいは教員を対象に以下の研究を行う。（研究１）規範遵守目標を強調することが向社会的目標の強調に比べ、心理的リアクタンスを高め、当該目標の共有を低めるのかを検討する。（研究２）学級で社会的な目標はどのように提示されているのかを観察する。（研究３）（２）の結果をもとに規範の伝え方が心理的リアクタンスおよび目標の共有に及ぼす影響を検討する。（研究４）教師評定の社会的目標構造尺度を作成し、教師要因との関連を探る。

３．研究の方法

研究１

実験参加者　大阪府内の公立小学校の 5，6 年生 139 名（女児 = 66 名，男児 = 73 名）に実験への参加を求めた。なお，回答者が小学生であることも踏まえ，手続きや項目に不明な点がないか事前に関西圏内の大学生 24 名（女性 = 13 名，男性=11 名）を対象に予備実験を実施した。

手続き

規範遵守目標場面と向社会場面をそれぞれ提示する質問紙実験を被験者内計画で行った。規範遵守目標および向社会目標が提示される場面について，5 コマの漫画形式の刺激をそれぞれ作成した。両目標が強調される場面として，新学期が始まり，新担任が学級目標を強調するという内容を設定した。質問紙では「以下の文章を読んで，次のページの質問に答えてください。」と教示し，目標の場面を提示した。その直後に「あなたが，もしもこのクラスの児童だったとすると，このクラスにいることについてどのように感じますか。気持ちを想像して，以下の質問に答えてください。」との教示のもと，心理的リアクタンス，目標の共有を尋ねる項目への回答をもとめた。すべての項目について「全くそう思わない」(1) ―「とてもそう思う」(5) の 5 件法で回答を求めた。具体的な項目内容は以下のとおりであった。

心理的リアクタンス　Dillard & Shen，2005 や Rains & Turner (2007)を参考に，ネガティブ感情とネガティブ認知を測定する 7 項目を作成した。ネガティブ感情：イライラする，うれしい(逆転項目)，楽しい（逆転項目），はらが立つ。ネガティブ認知：めんどうなクラスになりそうだ，クラスがつまらなさそう，クラスにくるのが楽しそう(逆転項目)。

目標の共有　担任の強調する目標の共有について，以下の 3 項目を作成した。先生のいうことを守ろうと思う，先生のいうとおりだと思う，先生のいうことは聞きたくないと思う（逆転項目）。

研究２

小学校４～６年生の担任及びその学級の様子について観察した。観察時期は、４月の学級開き時、７月の終業式前、12 月終業式前の 3 回であった。全学年 2 クラスずつで、5～6 年生は全ての期間、4 年生は 7 月以降の期間を記録した。教員ならびに学校との打ち合わせの上，発話者である教員の声が収録でき，かつ全体の様子が分かる教室後方にカメラを設置し，児童らに調査目的について説明したうえで撮影を実施した。記録されたデータについて，意味が分かる発話単位で抽出し，そのときの様子とともに文字起こしを行った。この際，規範の共有ならびに秩序の維持を目的とし教師が発する言葉やジェスチャーなど，学級の社会的目標を伝達するためと考えられるもののみを分析の対象とした。

研究 3

観察の結果および理論的な背景から、規範の伝え方について 2 つの要因に着目した。1 点目はメッセージの強度（強い表現：命令 vs 弱い表現：提案）であり、2 点目はメッセージの価（接近：～することを強調　vs 回避：～しないことを強調）であった。これらの組み合わせで 4 場面を想定し、研究 1 と同様の手法で実験を行った。
実験参加者　大阪府内の公立小学校の 4～6 年生 178 名（女児 = 97 名，男児 = 73 名、不明=8 名）。刺激はメッセージの強度を参加者間要因、メッセージの価を参加者内要因とした 2 要因 2 水準混合計画とした。評定尺度は研究 1 と同じく「心理的リアクタンス」「目標の共有」であった。

研究４
社会的目標構造と教師の心理特性との関連を調べるため、全国の小学校教員経験を有する者に調査を行った。調査は WEB 調査会社を通じて依頼した。回答者は 200 名（男性=130，女性=70）であった。質問紙にはデモグラフィックと共に社会的目標構造を測定する項目群、教師効力感（中嶋・清野・久坂，2017）、教師の達成目標（Shim et al.，2013）を盛り込んだ。

４．研究成果
研究１
予備実験
本実験と同様の手続きで予備実験を大学生に行い，手順や項目について問題がないことを確認した。本実験は小学生を想定したものであるため，予備実験の参加者には小学校高学年になったつもりで回答するように教示した。対応のある t 検定の結果，規範遵守目標場面(M = 3.33, SD = 0.69)におけるリアクタンスが向社会的目標場面(M = 2.64, SD = 0.99)よりも高かった(t (23) = 2.41, $p < .05$)。
本実験
小学生を対象とした実験を行った。各評定項目の記述統計は Table1 のとおりであった。規範遵守目標の提示がリアクタンスに及ぼす影響を検討するため，対応のある t 検定を行った。その結果，規範遵守目標は向社会的目標の提示に比べリアクタンスの得点が高かった(t (129) = 2.76, $p < .01$)。目標の共有について，場面による差は確認されなかった(t (137) = 0.36, ns)。

Table 1 評定尺度の平均値，標準偏差，信頼性係数（α）

	向社会的目標場面		規範遵守目標場面	
	M (*SD*)	α	*M* (*SD*)	α
リアクタンス	2.33 (0.97)	.90	2.59 (1.00)	.90
目標の共有	3.96 (0.95)	.78	3.93(0.97)	.78

次に、規範遵守目標の提示が心理的リアクタンスを介して，目標の共有に及ぼす効果を調べるため，2 水準参加者内計画の媒介分析を行った。結果，媒介効果が確認された(b = -.13, $p < .05$, 95%CI[-.25, -.04])。すなわち，規範遵守目標の提示は向社会的目標に比べ心理的リアクタンスを喚起させる。そして，喚起されたリアクタンスが高い者ほど目標の共有が低くなるといえる。

研究２
社会的目標に関する教員の発話数は期間全体で 137 件であった。それらについて KJ 法に類似する方法を用いて研究代表者と研究協力者の 2 名でカテゴリを分類した。カテゴリは、①伝達したい社会的目標の内容、そして②表現方法についてそれぞれ分類した。

具体的内容
目標の具体的な内容に関する言葉かけは，教室での着席や傾聴姿勢に関する「A:教室での静かさ，落ち着き」，準備や宿題・提出物についての「B:課題に対する態度」，攻撃行動の抑止である「C:反社会的ふるまいの禁止」，返事や謝罪行動の促進を含む「D:あいさつ」，周囲の状況を見て動くといった「E:状況を把握したうえでのふるまい」，協力行動や配慮を促す「F:向社会的行動の促進」，そして分類不能の「G:その他」の 7 つの大カテゴリに分類された。これらのうち、特に A から D は規範遵守目標に関する内容、E,F については、向社会的目標に関する内容だと考えられる。

表現方法
言葉かけの表現方法については，大きく 3 つに大別した。それぞれ，取るべき行動・望ましい事柄を明示した「接近」（例：～しよう），望ましくない状態を避ける表現の「回避」（例：～し

ない），それ以外の「その他」（ほめ，許可，事実や価値観のみの提示等）である。
伝達内容と表現方法の関連　伝達内容の 7 カテゴリと，表現方法の 3 カテゴリの関連を検討するため，クロス集計表を作成した。表現方法については，「その他」の表現が多用される傾向にあるものの，回避に比べると接近が多く用いられることがわかった。また，規範については、接近が多いものの両方の表現が用いられ、向社会的目標について，回避表現はほとんど使用されていないことが明らかとなった。

Table 2 目標の内容と表現方法

	接近	回避	その他
教室での静かさ、落ち着き	23	5	47
課題に対する態度	6	4	14
反社会的ふるまいの禁止	3	3	1
あいさつ	1	0	4
状況を把握した上でのふるまい	1	0	4
向社会的行動の促進	6	1	10
その他分類不能	0	0	5

研究３

研究２の結果を踏まえ、接近・回避といった表現の価に着目し、規範の表現方法の違いが心理的リアクタンスおよび目標の共有にどのような影響をもたらすのかを検討した。実験では、先行研究を踏まえ、表現の強さ（統制的 vs 非統制的）の次元も加え、2 要因 2 水準混合計画の実験を行った。言語表現については、Table3 に示す。

Table 3 各群における表現方法の違い

	接近	回避
非統制的	宿題をもってきましょう	宿題をわすれないでください
(提案表現)	授業中は静かにしよう	授業中はしゃべらないでください
	学校の物を大切に扱おう	学校の物を乱暴にあつかわないでください
	あいさつをしよう	あいさつをわすれないでください
統制的	宿題をもってきなさい	宿題をわすれないようにしなさい
(指示表現)	授業中は静かにしなさい	授業中はしゃべらないように
	学校の物を大切にあつかいなさい	学校の物を乱暴にあつかわないように
	あいさつをしなさい	あいさつをわすれないようにしなさい

その結果、心理的リアクタンスについて、表現の強さと価の交互作用が有意であった($F(1,166) = 19.86$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .11$)。単純主効果の検定を行ったところ、非統制的表現では接近表現が回避表現に比べ、心理的リアクタンスが低かった。一方、統制的表現では回避表現が統制表現よりも心理的リアクタンスが低かった。交互作用について、Figure1 を確認されたい。なお、目標の共有についても同様の結果が見られた。

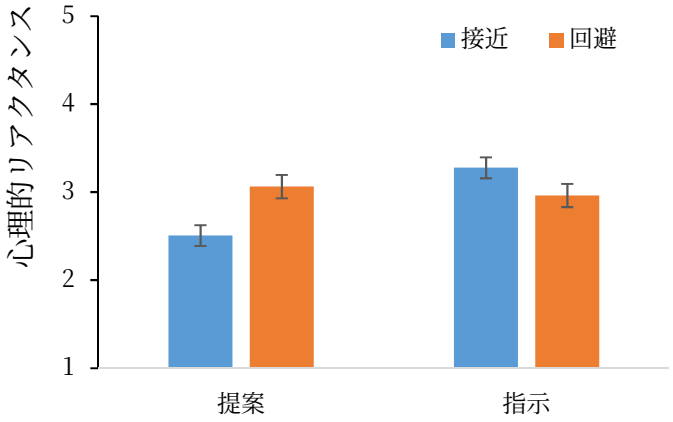

Figure1　心理的リアクタンスにおける表現の強さと価の交互作用

次に、統制的表現および非統制的表現ごとに、接近・回避表現が心理的リアクタンスを介して目標の共有に及ぼす影響を検討した。その結果、非統制的表現では、接近表現がリアクタンスを低めることで、目標の共有を高めていた。一方、統制表現では、回避表現がリアクタンスを低めることで、目標の共有を高めていた。これら一連の結果から、提案表現で規範を伝えるのであれば、接近的な表現が望ましく、指示的（強制的）表現を用いる際は、回避的な伝え方をすると表現が和らぐことで、リアクタンスが低まりかえって規範が共有されると考えられる。

研究４

教師評定の社会的目標構造と教師の自己効力感ならびに教師の達成目標の関連を検討した。社会的目標構造を測定すると考えられる質問項目に対して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、2 因子が抽出された。第１因子は児童たちに、「相互の思いやりが大切だということを強調している」など、向社会的な内容が高い負荷を示したことから、向社会的目標構造と命名した。第２因子は「必ず学級のルールを守るように、児童たちに伝えている」など規範に関する項目が高い負荷を示したことから規範遵守目標構造と命名した。これは児童対象に行った研究代表者の既存の研究結果とも共通する内容である。なお、結果の頑健性を検証するために、東北地方の小学校教員（471 名）に同じ項目を実施し、確認的因子分析を行ったところ高い適合度を示した($\chi^2(19)= 61.03$, $p < .001$; CFI = 0.94, RMSEA=.07, SRMR= .04)。

社会的目標構造と教師効力感、教師の達成目標との関連を検討するため、重回帰分析を行ったところ、向社会的目標構造は学級経営に対する効力感、指導方略に対する効力感、児童支援に対する効力感と正の関連を有していた。一方、教師の達成目標について、向社会的目標構造は熟達目標と有意傾向ながら正の関連を有していた。規範遵守目標構造はどの変数とも正の関係を有していなかった。

これら一連の研究を通じて以下のことが分かった。

（１）規範を学級で強調することは、心理的リアクタンスを高めやすく、そして心理的リアクタンスが発生すればかえって規範の定着を阻害するというメカニズム

（２）学級で規範を含む社会的目標はどのように強調されているのか：接近的・回避的表現が用いられている

（３）規範を効果的に伝える方法：メッセージの統制力が強くない場合は、接近的に伝える。一方メッセージの統制力が強い場合は回避的に伝えると心理的リアクタンスを発生させにくい。

（４）教師評定の学級の社会的目標構造のうち、向社会的目標構造は様々な教師の自己効力感と関係していた。

以上の成果は、学級経営の方略に示唆を与えるものであると考えられる。今後は、これらを基にした介入研究やよりエビデンスレベルの高い研究を行っていく必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Ohtani, K. & Okada, R	４．巻 13
２．論文標題 Relationship between classroom social goal structures, gender, and social outcomes in Japanese elementary school children	５．発行年 2018年
３．雑誌名 School Psychology International	６．最初と最後の頁 435-453
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1177/0143034318788120	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ohtani, K. & Hisasaka, T.	４．巻 13
２．論文標題 Beyond Intelligence: A meta-analytic review of the relationship among metacognition, intelligence, and academic performance.	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Metacognition and Learning	６．最初と最後の頁 179-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1007/s11409-018-9183-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大谷和大、山村麻予	４．巻 85
２．論文標題 学級の社会的目標の提示が心理的リアクタンスと目標の共有に及ぼす影響	５．発行年 2017年
３．雑誌名 心理学研究	６．最初と最後の頁 299-503
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.4992/jjpsy.88.16349	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大谷和大・岡田涼・中谷素之・伊藤崇達	４．巻 64
２．論文標題 学級における社会的目標構造と学習動機づけの関連　―友人との相互学習を媒介したモデルの検討―	５．発行年 2016年
３．雑誌名 教育心理学研究	６．最初と最後の頁 477, 491
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.5926/jjep.64.477	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 岡田涼・大谷和大	4．巻 25
2．論文標題 児童における社会的目標構造の認知と協同的な学習活動―動機づけを介する過程の検討―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 パーソナリティ研究	6．最初と最後の頁 248，251
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.2132/personality.25.248	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ohtani, K., Murayama, K., Ishii, R., Fukuzumi, N., Ishikawa, S., Sakaki, M., Suzuki, T., & Tanaka, A.	4．巻 49
2．論文標題 Parental motivational perseverance predicts adolescents' depressive symptoms: An intergenerational analysis with actor-partner interdependence model.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of Youth and Adolescence	6．最初と最後の頁 212,227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.1007/s10964-019-01083-2	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 大谷和大、山村麻予
2．発表標題 学級の社会的目標の提示が心理的リアクタンスと目標の共有に及ぼす影響
3．学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 大谷和大
2．発表標題 学級の社会的環境と学習動機づけ
3．学会等名 第59回日本教育心理学会総会　自主シンポジウム『動機づけ』を支えることを考える
4．発表年 2017年

１．発表者名 Ohtani, K., & Hisasaka, T.
２．発表標題 The Relationship between metacognition and learning performance: A meta-analytic review.
３．学会等名 15th European Congress of Psychology (ECP 2017)（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 大谷和大・岡田涼・中谷素之・伊藤崇達
２．発表標題 小学校における学級の社会的目標構造と学級適応の関連　―関係向上行動を媒介としたモデルの検討―
３．学会等名 日本発達心理学会第27回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Ohtani, K., & Hisasaka, T.
２．発表標題 A meta-analytic review of the relationship between metacognitive skills and learning performance.
３．学会等名 the 31st International Congress of Psychology (ICP 2016)
４．発表年 2016年

１．発表者名 大谷和大・岡田涼
２．発表標題 学級の社会的目標構造と学習動機づけの関連―2時点の調査による検討―
３．学会等名 日本教育心理学会第58回総会
４．発表年 2016年

１．発表者名 大谷和大・山村麻予
２．発表標題 学級の規範の伝え方が児童の心理的リアクタンス、規範の取り入れ意図に及ぼす影響
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山村麻予・大谷和大
２．発表標題 学級での社会的目標の提示における言葉かけ分類～具体的内容と表現表法の関連
３．学会等名 日本教育心理学会第61回総会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

１．著者名 岡田涼・小野寺義孝（編著）：大谷和大（第3章、第8章執筆）	４．発行年 2018年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 180ページ(p25-37，p97-107)
３．書名 実践的メタ分析入門：戦略的・包括的理解のために	

１．著者名 大谷和大（兵藤宗吉・緑川晶（編））	４．発行年 2017年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 258(p121-136)
３．書名 こころの科学―理論から現実社会へ―第2版（動機づけ（第6章担当））	

１．著者名 大谷和大（加藤弘通・川田学（編）） 	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房 	５．総ページ数 222ページ(p125-136)
３．書名 心理学概論（教育と学校――学習と心理適応を支える――（第9章）担当）） 	

１．著者名 大谷和大（氏家達夫（編）） 	４．発行年 2020年
２．出版社 ナカニシヤ出版 	５．総ページ数 印刷中
３．書名 教育と発達の心理学（児童期における学習：学級の社会的環境と学習） 	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考